

Title	秋成と住吉御田植神事
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	やそしま. 2007, 1, p. 34-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50072
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

秋成と住吉御田植神事

飯倉洋一

住吉の御田植神事については、「すみのえ」二一九号（平成八年一月）の大垣豊隆「住吉大社の御田植祭」に三八ページに亘って説かれ間然するところがない。近世期については、梅園惟朝の『住吉松葉大記』が詳しいこと、『住吉名勝図会』（寛政六年刊）に豊富な図版があることなどが指摘されている。近世期、御田植は五月二十八日に行われていた。

『摂津名所図会』（寛政十年刊）は、

「みとしろ神田になぐ苗をうゆ殖るのさいしき祭式也。此日しやむじやうしや社務乗車してけいゑん徑営あり。又かみちう神宮寺のしやう社僧かちう甲冑を着てゆげ遊戯す。甚はなはだ法式ほうしきあり、又いづか泉州みづか大津よりでんがく田楽人げい来てげい藝を行ふ。又いづか堺ノちりう津乳守ノけいせ傾城かちう来ッておん御田を植る体あり。昔はみづか自らうへ植し也。此神事既によさい一千有余歳きよにきよ逮ぶ也とぞ。田楽でんがくのはじめは朝てう野群やぐん載さいにつちか詳也。此日えん遠近よりけいじん詣人いな稻麻いなのしや如社頭きんのきん賑はひははん方なし。（下略）」

とそり辰つちつつハここ抽ひしる。

江戸を仁まする。ブノヲ日背前に 享和元年 暮斥の支酉甚定行として大坂鍾屋詰を拝命

赴任当初は連日のように大坂の名勝を訪ね歩いている。五月二十八日は御田の祭りを見に行き、その様子を『蘆の若葉』に活写する。たとえば「又神宮寺の僧、いかめしげに先をおはせ、列を正して神前にむかふもあり。又は甲冑して巾をいたゞき、薙刀をつき、高あしだはきて出来る。陣笠はきたる足軽、長き棒もちて走りめぐる。御田植の後に足軽ども左右にわかれ、棒うちふりて戦ふ事あり。これ神功皇后三韓をうち給ひし事を表せりとぞ」のごとく、簡潔にして臨場感溢れる文章は巧みである（ただし傍線部は『撰津名所図会』の記述を参照しようだ）。

上方に來た南畝が、その文章力に驚き「奇」と賞した（『長夜室記』）のが、当時京都に住み、故郷大坂にも時々出てきていた上田秋成の文章であった。秋成にも「五月雨は降るともゆかな墨江のみとしろ小田の早苗取見に」（『藤篋冊子』）の御田植詠がある。また、秋成が和文を学ぶ女性に模範文例集として書き与えた十二月の月次消息のうち、五月の手紙として書かれた文章があるが、それは住吉の御田植の話題から始まる。引用してみよう。

墨の江のみとしろ田植るを、見に出たまへりしとや。いきあひし人の告侍き。空も清うて、をかしき御ありきにこそ。なほらひ殿の風流、みはて、帰り給はむに

は、芦分ぶねささせて、螢のひかりに盃巡らせたまはむこそ、ことにをかしく侍らめ。此あかきに物狂はしくおはせし、兵部卿のみこゝろには、まさりていとどのかなる御遊びぞかし。あなたのし。(下略)

文化五年刊行の『文反古』という消息文集に収められている。手紙の相手が御田植を見物のあと螢遊びに興じたことを羨望する趣の文章である。「なほらひ殿」は本来、神祭に奉仕した神職その他の奉仕者が酒食をいただく「直会なほらい」を行う殿舎。秋成の『安々言』に「神祠ノ祭礼竟テ内宴ニ着所ヲ、直相殿なほらいト名ク」という。伊勢神宮・賀茂別雷神神社などには常設される(鶴岡八幡宮を舞台にした秋成の物語「剣の舞」にも「なほらひ殿」が登場する)が、江戸時代の住吉社の境内図を閲してもそう呼ばれる建物はないようだ。中世の住吉の神事を記す津守棟国『住吉太神宮諸神事次第』の御田植神事の項には、神官が四つの宮のお供物を備進した後、御厨で「御直会」を行うとある。消息にいう「なほらひ殿の風流」は直会の間に行われる風流ふうりゅうを指しているのだろう。さて、このあと舟を浮かべて螢に興じたとあるが、住吉からの帰途螢遊びというのは川を北上したということだろう。南畝の『蘆の若葉』では陸路のようだが、船で住吉へ行くことがあるのか。享和二年に来阪した曲亭馬琴は八月に住吉詣でを行うが、その時のことを「いざや住よしへ詣でんとて、書肆

大野木氏やかた船を用意して、予をいざなひ、心齋橋より乗出して、住吉明神へ参詣す」(『羈旅漫録』)と書いている。船路もあつたということだ。なお、「兵部卿のみこゝろ」とは『源氏物語』「蛭卷」で、源氏が蛭の光で玉鬘の姿を照らし出して兵部卿宮を驚かし、兵部卿宮が心ときめかす場面を指すのだが、それにもましてのどかな遊びですねというのである。いずれにせよ、秋成によって選ばれた五月の風物は、住吉の御田植神事と蛭だつたというわけである。

(大阪大学教授)